

そ	せ	す	し	さ	こ	け	く
空を行く船	セピア色のわたし	捨てる神あれば	七月四日(一八六八)	最終バス	ここだけの話	計算機	食いしん坊侍
135	125	113	103	93	83	75	63

き	か	お	え	う	い	あ	も
気前のいい友だち	陽炎の向こう	大きな窓と影絵	縁を切ってみた件	嘘つきな鏡に映る真実	市場で見つけた	哀れな神の探しもの	く じ
55	47	37	29	21	15	5	



どこからともなく聞こえてくるのは、  
多くの人々からの願い。

それらの願いは、小さなことから、

わたしの手に余る

とてつもなく大それたことまで、さまざまだ。

わたしは、この世界に

数多存在する「神」の「一柱」。

神なんていないと考える人もいるだろう。

ではなぜ、人は遥か昔から、

祈るという形で己の願いを神に託すのか。

人は自分の能力を過信する割に、

心はそれほど強くない。

だから、わたしを頼る。

わたしは人智を超えた存在だった。

この世の安寧を保つ責任もあると自負している。

願いはパチパチと騒がしく、火花のように弾ける。

痛くも痒くもないが、

放置する訳にもいかない。

とても落ち着かないからだ。

まるで雨のように

願いが降りそそぐ日もある。

そんな日は、まったく安らげない。

「可」

「不可」

ボタンを操作するように

願いを処理していく。



だが、わたしにも得手不得手があり、  
処理できない場合は、

別の神に申し送ることになる。

東奔西走。休む暇もない。

「案外、親切なんだ」

と思うかもしれない。

無視することは容易い。

実際、すべて無視すると決め、

長い眠りについた神もいる。

しかしわたしは煩雑で、

あまりに身勝手な願いに呆れ、

不快に思いながらも、

人と向き合ってきた。

願いの中には絶対に無理なものがある。

根拠や原因がなく結果だけを望む願いだ。

それは神の力をもってしても叶わない。

「撒かない種は生えない」のだ。

無理な願いばかりを浴び続けると、

「陰り」が生まれる。

神にとって、陰りは忌むべきことだ。

それは力のバランスを崩し、

この身が荒む原因となる。

荒んだ拳句の果ては、荒ぶる神になる。

そんなケースをたくさん見てきた。

陰りを消すのはそう難しいことではない。

純粹な感謝の思い。

